

解放前の中国農村の共同性

—江西省西南地域の村落を事例として—

鄭浩瀾

I はじめに

本論文は、解放前の中国農村における共同関係の性格を検討する試みである。周知のように、日本における中国農村研究の領域では、1930年代から40年代にかけて華北地域の村落が「共同体」であるかどうかをめぐって「平野・戒能論争」があった¹⁾。その後、旗田巍、福武直、村松祐次などの研究によって、華北の村落は明確な境界と領域を持たず、団体的性格が弱かったことが明らかになり、華北村落の共同体的性格の存在が否定されるようになった(旗田巍, 1973; 福武直, 1976; 村松祐次, 1975)²⁾。しかし、1980年代以降、解放前(中華人民共和国成立前)の村落を「共同体」と捉える研究が再び現われた。石田浩と内山雅生の研究はその代表作といえる。石田は解放前の村落を「生活共同体」とみなし、「農業集団化や人民公社化が『生活共同体』を解体することはできず、反対に『生活共同体』を利用することによって可能とした」と指摘した(石田浩, 1986, p. 28; 1991, p. 4, 635)。また内山は、石田の「生活共同体」の概念を批判しつつも、1949年以前の「看青」、「搭套」などの互助活動を「共同体」の活動とし、その存在が農業集団化の受け皿であったと主張した(内山雅生, 2003, pp. 155-158, 245-251)³⁾。

石田と内山の研究が現れた背景には、1980年代以降、人民公社が解体し、かつての社会主義とは何かという問題が提起されるようになったことがある。そうした中で、歴史的連

¹⁾ 論争の内容をまとめた論文および書籍については、以下の通りである。旗田巍(1995)、石田浩(1984)、内山雅生(1984)、奥村哲(2003)。

²⁾ 近年の日中共同調査の報告書からも、この点を再確認することができる。佐々木衛(1992)を参照。

³⁾ 石田の観点に対して、内山は「生活共同体」が感覚的表現の領域にとどまっており、それが機能し根強く存在していることについても実証していないと批判したが、両氏は解放前の農村社会における人的結合関係に着目してそれと解放後の農業集団化運動との関連性を検討する点では同様である。石田に対する内山の批判については、内山雅生(1987)を参照。

続性の視点から解放後（中華人民共和国成立後）の土地改革，農業集団化および人民公社化運動を見直そうとする動きが出ており，彼らの研究はこのような研究潮流のなかで現われたものである。同様な視点を用いて村落の人的結合と農業集団化との関係を検討したのには，川井悟と二宮一郎の研究もある（川井悟，1989；二宮一郎，1994）。たとえば，二宮は上海市近郊の村落を事例に村落の人的結合（血縁関係の強さと村民相互の共同労働慣習）が農業集団化を経ても存続し，また「集団化を有利にさえした時期があった」とした（二宮一郎，1994，pp. 17-19）。

上述した研究は，解放後の農業集団化が解放前の農村の共同関係に密接に関わっていたことを提示したものといえよう。しかし，これらの研究はほとんど農村の共同関係を村落内部に限って検討し，また村落内部の人的結合の関係が農業集団化の推進過程の中で機能を果たしたものと捉えている。その結果，村落内部の共同活動などが多く検討されているのに対し，かつて多くの先行研究が指摘した華北・華中村落の団体的性格の弱さが農業集団化の推進とどのように関わっていたのかについては，ほとんど検討されてこなかった。

華中村落の団体的性格の弱さについて論じたのには，福武直の研究がある。福武によると，華中の村落には集団行動（打更のような防衛のための共同活動，「看青」や共同灌漑のような農業生産の互助活動，「各戸別に費用を出し或いは労力を提供して道路修理やクリークの浚渫等をす」活動など）が少なく，集団性が弱かった（福武直，1976，p. 249）。しかし，その理由の1つとしてあげられているのは，同族結合の村落（以下，同姓村）が多く，異姓雑居の村落（以下，雑姓村）が少なかったことである（福武直，1976，p. 239-252）。すなわち，福武の認識では，村落が「同族によって構成される場合，地縁的契機は血縁的契機によって一層強化されて，血縁的な同族生活がそのまま村落生活となる。そしてその結合は極めて鞏固なものとなり，対外的にも封鎖性の度を高めるのである」（福武直，1976，p. 242）。このような同姓村が強固な結合体であるという認識は，福武だけでなく，多くの研究者がもつものである。この認識の下，同姓村が少ない華北・華中の農村では，社会の内的凝集力が弱く，反対に同姓村が多い華南の農村では，内的凝集力が強いと一般に捉えられている。

たしかに，同族村は宗廟・族譜・族産といった共有財産を持ち，また祖先祭をはじめとした共同活動も多く行われていたことから，雑姓村よりは集団性が高いといえる。しかし，同族結合の強弱はただ村落の性格を規定する要因の1つにすぎない。なぜならば，同族村であれ雑姓村であれ，村落が個々の家から構成される点においては同様であり，そうである以上，村落の性格は内的には家族のあり方に規定されると思われるからである。この点からみて，農村の共同関係は村落内部に限って検討することはできない。そこで重要なのは，村落内部の共同活動の存在よりも，むしろ，村落を構成する個々の家がどのように共同活動に関わっていたのかという問題であるように思われる。

本論文で事例として取り上げるのは，江西省旧寧岡県（現井岡山市）⁵⁾ 管轄下の21の村落である。この21の村落は，①規模が比較的小さかったこと（すべて50戸以下），②村落間

の距離が近かったこと（約 500 m以内）という 2 点において、福武が指摘した華中の一般的な特徴をもつものといえるが、同姓村が雑姓村より多かった（前者は 15、後者は 6）点では、華南の特徴も示している（福武直，1976，p. 237-247）。このような 21 の村落はそれぞれ個性があったが、本論文はそれらに留意しつつも、その共通の性格に注目する。具体的には、1940 年代には村民の間でいかなる共同活動が行われ、その共同活動の物的基盤としての共有財産がどのようなものであったのかについて検討し、そのうえで共同関係の性格の分析を試みる。資料としては、2003 年 3 月から 2006 年 9 月まで、4 回にわたって村落の老人 29 名を対象に実施したインタビューの結果を主に用いるが⁶⁾、『寧岡県誌』、『寧岡県地名誌』をはじめとした地方史文献も適宜参照する。

II 調査村落の概況

1) 自然状況

筆者が調査を行ったのは、江西省井岡山市（旧寧岡県、以下は寧岡県）龍市鎮の石陂行政村と相公廟行政村が管轄する 21 の村落である。寧岡県は、江西省と湖南省の辺境地域に位置し、井岡山革命根拠地の中心部であった。1995 年に出版された『寧岡県誌』によれば、山地・丘陵・平原は寧岡県総面積のなかでそれぞれ 55%、25%と 20%を占めており、平原地帯が比較的少なかった（寧岡県地方誌編纂委員会 1995，p. 108）。しかし、気候は温和で、水資源も豊富であり、平原地帯は農耕作に有利な自然環境に恵まれている（寧岡県人民政府地名辦公室 1987，p. 6）。「龍江」およびその支流が貫流しており、川周辺の平原地帯には村落が多く分布している。

まず、石陂行政村の管轄下の村落についてみよう。現在の石陂行政村の管轄下にある石陂・上橋・源口・旺宜洲・樟樹坪・竹下といった 6 の村落は、1940 年代には寧岡県龍市鎮第 5 保の管轄下にあった。そのなかで、竹下が唯一の雑姓村であり、ほかの 5 つの村落はすべて同姓村であった。そしてこの 5 つの同姓村のなかで、石陂・上橋と源口は規模の大きい陳氏宗族の村落であり、その人口は現在の石陂行政村総人口の 70%以上を占めているのに対し、旺宜洲と樟樹坪はいずれも規模の小さい同姓村である。とりわけ樟樹坪は小さく、1949 年にはわずか 6 戸しかなかったようである（表 1 を参照）。

⁵⁾ 寧岡県は 2000 年 6 月に撤廃され、代わって井岡山市が成立したが、本論文の研究時期は 1950 年代初期であり、当時調査村落が「寧岡県」の管轄下にあったことから、井岡山市ではなく、寧岡県という名称を用いることにする。

⁶⁾ 本論文は筆者の博士論文の一部に加筆修正を行ったものである。筆者は調査村落において 4 回（2003 年 3 月 8 日から 21 日，2003 年 8 月 8 日から 9 月 7 日，2004 年 8 月 12 日から 9 月 11 日，2006 年 8 月 22 日から 9 月 2 日）にわたって 60 名の村民を対象に、解放前から解放後の土地改革、農業集団化運動および人民公社の成立と解体についてインタビュー調査を実施した。

石陂行政村と比べて、現在の相公廟行政村の管轄下にある15の村落は規模が小さく、行政村の全人口の大半を占める宗族はなく、逆に同じ宗族の成員が異なる村落に分散していたことに特徴がある。表2が示しているように、1940年代末期には、10戸以下が多く、2〜3戸しかなかった村落もあった。このような小規模の村落が多く形成されたのは、丘陵地帯に位置して家を建てる土地が限られていたため、村民がほかのところに移住せざるをえなかったからである。たとえば、水東の始遷祖は近隣の燕窩形の肖氏宗族の成員であり、相公廟の始遷祖は含鏡の肖氏宗族の成員であった。また、豆沖・亜叉坳・水東・龍背・相公廟・含鏡・燕窩形という7つの村落は土着民⁷⁾の村落であったのに対し、残りの8つは客家の村落であった。1940年代には、寧岡県国民政府が土着民と客家を分けて行政区画を編成する政策をとったため、これらの村落は遠く離れていないものの、それぞれ橋頭郷第1保と河橋郷第1保の管轄下にあった。

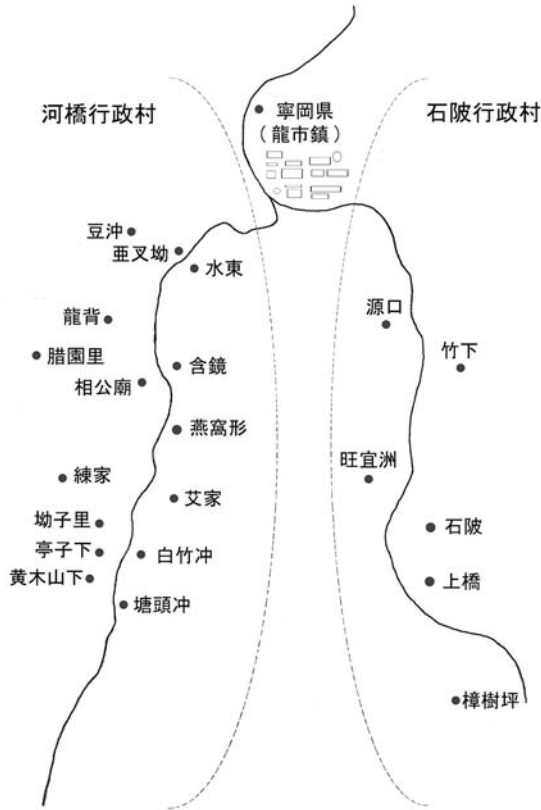
全体的には、1940年代の調査村落のなかで、同姓村が多かった。同姓村のなかでは「族＝村」と「族>村」という2つの類型に整理できる。「族＝村」とは1つの村落が1つの宗族からなる場合を指し、旺宜洲・豆沖・龍背・樟樹坪・練家・艾家・白竹沖・塘頭沖がそれである。それに対し、「族>村」は、ある宗族の規模が1つの村落に限定されず、周辺地域の多数の村落まで含む場合をさす。調査村落のなかでこの類型に属するのは、陳氏宗族の石陂・上橋・源口、肖氏宗族の相公廟・含鏡・燕窩形、徐氏宗族の坳子里・白竹沖である⁸⁾。また、一定の規模を持つ宗族は分節としての房に分けられる。調査村落では、房の存在が顕著であったのは石陂・上橋・源口という45戸以上の村落である。とりわけ石陂における房の居住範囲は明確であり、その範囲は末端行政組織としての甲の範囲と重なっていた。それに対し、上橋・源口では、房の明確な居住範囲はなく、甲も房と関係せずに戸数にしたがって編成されていた。

また、以上のような21の村落はそれぞれ個性があったが、個々の家から構成された点では同様である。ここでいう「家」とは、「同居共財関係」、すなわち住居・財産と食事の共同関係をもつ組織をさし（滋賀秀三，1975，p.56；清水盛光，1949，pp.2-3），農村では保甲編成の基本的単位である「戸」と同様なものである。1950年代の寧岡県では9,749戸，33,580人がいたことから（寧岡県地方誌編纂委員会1995，p.140），各家の平均人数は3〜4人程度であった。

⁷⁾ ここでいう土着民は客家と対照される概念である。寧岡県の客家は主に明末から清朝の初期にかけて、戦乱、過重な徴税・徴兵や未耕作地の開拓に対する清朝政府（康熙）の奨励政策などにより、広東省と福建省から流入した客家方言をもつ移民群であった。それに対して土着民はそれ以前に寧岡県に居住した人々をさす。

⁸⁾ 「族>村」は必ずしも同姓村の場合に限らず、雑姓村の場合にも見られる。たとえば、坳子里と白竹沖を構成する徐氏宗族は、雑姓村の腊園里と亭子下にも居住していた。肖氏宗族も同様に、同姓村の相公廟・含鏡・燕窩形だけでなく、雑姓村の亜叉坳・水東にもその成員がいた。

図1 調査村落の地図



(出所) インタビューより，筆者作成。

表1 石陂行政村の村落の基本状況（1949年頃）⁹⁾

村名	戸数	姓氏	村の形成期	元遷移地	鎮までの距離 (km)
樟樹坪	6	黄	清朝嘉慶年間（1796 - 1820）	龍泉	鎮東南 4.5
上橋	50	陳	不明	石陂	鎮東南 3.5
石陂	50	陳	北宋至道年間（995 - 997）	江西吉安	鎮東南 3
旺宜洲	24	楊	不明	江西吉安	鎮東南 2.5
源口	45	陳	南宋景定年間（1260 - 1264）	石陂	鎮東南 1.5
竹下	12	林 4, 劉 1, 藍 3, 鐘 1, 肖 2, 張 1	清朝乾隆の末年（1786 - 1795）	江西安義	鎮東南 2

(出所) 寧岡県地名辦公室編（1987），p. 31-32

⁹⁾ 同表で示されている戸数はただ 1949 年頃の大まかなものであり，精確なものではない。なお，村落内部における姓の構成，村の形成期，元遷移地および鎮までの距離は、『寧岡県地名誌』から引用したものである。

表 2 相公廟行政村の村落の基本状況（1949 年頃）¹⁰⁾

村名	総戸数	姓氏	村の形成期	元遷移地	鎮までの距離 (Km)
豆沖	13 - 14	張	清朝順治年間 (1644 - 1661)	永新県	鎮西 2
歪叉坳	7	肖 1, 謝 2, 張 2, 薛 1, 鄒 1	清朝順治年間 (1644 - 1661)	湖南省茶陵県	鎮西南 1
水東	4	肖 2, 劉 1, 頼 1	清朝道光 10 年 (1830)	燕窩形	鎮西南 1
龍背	20 - 26	張	明朝万歴 33 年 (1605)	古城	鎮西南 1.5
相公廟	6	肖	清朝道光年間 (1821 - 1850)	含鏡	鎮西南 2
含鏡	15 - 16	肖	不明	不明	鎮西南 2
燕窩形	3	肖	明朝万歴年間 (1573 - 1620)	龍市村	鎮西 2.5
練家	4	練	不明	永新県	鎮西南 3
艾家	6	艾	清朝乾隆の末年 (不明 - 1795)	観背隴	鎮西南 3
腊園里	10	徐 6, 李 1, 張 2, 關 1	清朝光緒年間 (1875 - 1908)	鵝沖	鎮西南 2
坳子里	10	徐	不明	南塘山	鎮西南 3
亭子下	6	徐 1, 李 2, 鄒 3	清朝光緒の末 (不明 - 1795)	南塘山	鎮西南 4
黄木山下	9	林 6, 黄 1, 王 2	清朝咸豊年間 (1851 - 1861)	東上	鎮西南 4
白竹沖	2	徐	清朝光緒の末年 (不明 - 1795)	南塘山	鎮西南 4
塘頭沖	6	李	清朝嘉慶年間 (1796 - 1820)	子源	鎮西南 4.5

(出所) 寧岡県地名辦公室編 (1987), p. 31-32

2) 1940 年代の調査村落

調査村落における共同活動を検討する前に、まず 1940 年代の社会背景に触れておきたい。前述したとおり、調査村落は井岡山革命根拠地の中心部であった。1927 年 10 月、毛沢東は秋収蜂起の残余部隊を率いて寧岡県に進駐し、江西省と湖南省の境界地域にある 6 つの県 (寧岡・永新・遂川・蓮花・茶陵・酃県) で、農民を動員して「打土豪」(土豪または地主の財物を奪い取ったり罰金を取ったりし、場合によっては土豪を処刑すること) を行い、共産党組織とソビエト政権を設立し、さらに土地革命を実行するという一連の活動を展開した。

龍市鎮では、1928 年 5 月から 7 月の間にソビエト政権が設立され、地主の土地が農民に配られたが、同年 8 月の紅軍の軍事的失敗により、ソビエト政権が崩壊し、農民に配られた土地が再び地主の手に戻された。1929 年 1 月に毛沢東の部隊が寧岡県を離れ、その時から国民党政府の本格的な統治が始まった 1933 年まで、地元の共産党員を中心に組織された「寧岡県ソビエト政府」が国民党軍とのゲリラ戦を展開し続けた。このような状況の下で、旺宜洲・龍背といった同姓村では、国民党の民団 (保安団や靖衛団) の参加者と共産党のソビエト政権 (赤衛隊・暴動隊も含む) の参加者が同時に現れ、内的には深刻な対立関係が生じた¹¹⁾。ほかの村落においては、このような対立関係はなかったようであるが、一部の

¹⁰⁾ 同上。

¹¹⁾ 詳細は、鄭浩瀾「宗族、農民と井岡山革命 (1927~1929 年)」、『中国研究月報』2008 年 3 月号を参照。

村民が共産党ソビエト政権の幹部や赤衛隊・暴動隊の隊員として革命に参加したことがインタビューを通して確認できる。

しかし、井岡山革命におけるソビエト政権は一時的かつ不安定なものであり、革命が村落内部の秩序を大きく変えたとは思えない。毛沢東は、1928年に寧岡県において次のように指摘したことがある。「社会組織は、一般にどこでも、1つの姓を単位とする家族組織である。村落内の党の組織は、居住の関係で、多くは1つの姓の党員が1支部をなしており、支部会議はまったく家族会議である。こうした状況の下での『闘うボルシェビキ党』の建設はほんとうに困難である」と（中共中央毛沢東編集出版委員会1991, p. 74）。この指摘は宗族が革命によって破壊されず、逆に井岡山革命に大きな影響を及ぼしたことを示唆している。

インタビューによると、1930年代頃において、伝統的な宗族秩序の維持者といえる族老は、族内の規則に違反した行為をした者に対して、場合によっては絶命させるまで処罰することができ、大きな影響力を持っていた。しかし、1940年代になると、族老の影響力が著しく低下し、替わって県・郷鎮で官職に就いた者か、県中学校の教員かが村落内の有力者となった。このような変化の背景には、日中戦争と国共内戦の勃発に伴い、国家が農村に対して徴税・徴兵をはじめとする行政統合を強化したことがあげられる。寧岡県では1940年代に県—郷鎮—保甲という行政体制が成立し、一部の富裕層出身者が県・郷鎮レベルの幹部にまで抜擢されるようになった。筆者の「1940年代の村落では誰の発言力が大きかったのか」という質問に対する村落古老の回答から、ほとんど県・郷鎮・保の幹部か、県中学校の教員であったことがわかった。表3はその回答の結果を示したものである。

表3に示された有力者の多くは地主であった¹²⁾。彼らは十数畝か、数十畝程度の土地しか持っておらず、福建・広東地域の地主と比べて多いたとはいえないが、人口の大半を占める貧農・雇農の土地所有の面積よりはるかに多かった。土地改革の資料をみると、1949年の時点で総戸数の62%~64%を占める貧農の土地所有の面積は、全体の中でわずか22%~26%しか占めておらず、平均でわずか3~4畝であった¹³⁾。

有力者は徴税・徴兵をはじめとする国家政策の執行に大きな影響力を持っていた。四川省の農村と同様に、1940年代の調査村落では、末端行政による徴税・徴兵はきわめて乱暴なものであり、その過程の中で地元有力者による不正行為が頻発した（笹川裕史・奥村哲，2007）。当時影響力が最も大きかったのは、石陂の陳ZHという人物であった。陳ZHは江西省保安団第10団の中隊長、遂川県保安団第3団の大隊長、寧岡県遊撃6隊の大隊長補佐など軍事関連の職を経験後、1946年頃に県国民党部の副書記を務め、県・郷鎮政府の幹部

¹²⁾ ここでいう地主とは、解放後の土地改革の中で階級成分が地主と評定された者をさす。

¹³⁾ この数字は現在井岡山市档案馆が所管する以下の史料を元に計算したものである。『石陂行政村土改試点工作總結』（井岡山市档案馆，1950年11月22日）。『河橋郷（村）土改前各階層土地及生産資料占有統計表』（井岡山市档案馆，1951年）。

を中心に「三民主義學術研究会」という政治団体を結成した。当時、龍市鎮第5保（現在の石陂行政村）の徴兵は、彼の影響下にあったようである。また、1946年に彼は龍市鎮政府が農民から徴収した「軍糧」（軍隊に供給する食糧）の一部を借りたのに対し、龍市鎮政府は返済を求めず、その分を新たに民から徴収することにした¹⁴⁾。このことも彼の影響力の一端を示しているといえよう。

表3 1940年代の調査村落における有力者

村名	有力者	地主の土地 所有数（畝）	官 職
樟樹坪		無	
上橋	陳 WL（男）	10-20	無
	陳 XN（男）	10-20	無
石陂	陳 ZH（男）	20	寧岡県保安団団長、 寧岡県支部の副書記
	陳 SD（男）	40-50	無
	陳 YS（男）	40	無
旺宜洲	楊 GY（男）	32	保長
竹下		無	
源口	陳 MZ（男）	27	国民党寧岡県支部の書記
豆沖	張 XY（男）	10-20	中学校の教員
	張 DM（男）	10-20	中学校の教員
歪叉坳		無	
龍背	張 JS（男）	20-30	無
水東		不明	
含鏡	肖 JK（男）	20-30	橋頭郷の郷長 橋頭郷第5保の保長
燕窩形	肖 ZF（男）	不明	
相公廟			
練家		無	
艾家		無	
腊園里		無	
坳子里	徐 KG（男）		中学校の教員
	徐 RC（男）		中学校の教員
亭子下		無	
黄木山下	林 S（男）	10-20	郷長
白竹沖		無	
塘頭沖		無	

（出所）インタビューより，筆者作成。

¹⁴⁾ 詳細は『會議記録簿・虧欠賦谷卷』（井岡山市档案馆，1946年4月）を参照されたい。

Ⅲ 共同活動と共有財産¹⁵⁾

1) 祖先祭と「紅白喜事」

それでは、共同活動についてみよう。1940年代の調査村落では、村民は正月・清明節・冬至といった伝統的祝日に祖先祭や行事を多く行っていた。祖先祭の場合には、族老と有力者がともに主催することが多かった。ただ、族老と有力者は個々の家を代表することができず、基本的には、一族の男子全員か、同姓の各家から男性代表が祖先祭に参加していた。

祖先祭のほか、「紅白喜事」(冠婚葬祭)の際に会食も多く行われていた。その場合には、族老と有力者の影響力はほとんどなかったようである。「紅白喜事」の主催者は当事者の家であったが、「小房」(房の中の分節)内の親戚が宴会の準備を手伝うのが一般的であった。そして参加者は房内の親戚に限らず、ほかの房、さらに他の村落の人であっても、当事者の家と仲がよければ、自由に参加できるという。

インタビューの結果をまとめてみると、次の2つの特徴があるといえる。第1に、雑姓村では、同族村に比べて共同活動が少ない。表4のように、正月・清明節・冬至といった伝統的祝日の際に、同族村では祖先祭を中心とした活動が多く行われていたのに対し、竹下・亜叉坳・亭子下・黄木山下・塘頭沖といった雑姓村では、村民は基本的には各自の家で活動していた。亜叉坳の老人謝FKはその一例である。謝FKの祖父は寧岡県古城郷長溪出身であったが、土地が無かったため、豆沖の地主の「長工」(年季奉公の作男)として豆沖に近い亜叉坳に移住した。1940年代の亜叉坳では、村民の「紅白喜事」があった場合には、謝FKはそれに参加するが、正月になると、出身地の長溪で行われる祖先祭に参加しに行くという。同様なことは竹下でもみられる。「紅白喜事」の場合には、姓を問わず、村民が会食の準備を手伝うが、祖先祭の場合には村民が各自で活動していた。

第2に、共同活動は必ずしも村落を単位として行われたわけではない。調査村落では、祖先祭などの共同活動は村落を越えて行われたことが多かった。この点は特に、同じ宗族

¹⁵⁾ 共同活動と共有財産の内容は、29名の村落の老人を対象にインタビュー調査を実施した結果をもとにまとめたものである。この29名の調査協力者の平均年齢が81歳で、その名前は以下の通りである。石陂(陳QL, 陳YD, 陳LQ), 上橋(陳FZ, 陳WZ, 陳MY), 源口(陳YM, 陳FM), 樟樹坪(黃FL), 旺宜洲(楊QC, 楊SZ, 楊XM, 楊JX), 竹下(陳YX, 林ZS, 肖JC), 相公廟(肖JX, 肖ZW), 豆沖(張HM, 張AM), 亜叉坳(謝FK), 龍背(張YT, 張ZL, 張BG, 張GY), 腊園里(徐YT), 練家(練XW), 艾家(艾ZF), 坳子里(徐RK)。具体的には、次のような聞き取り項目について質問を設定した。①1949年頃の村落戸数・族姓構成。②「換工」・「看山」・水利の修築と村民との関係。③結婚式・葬式・伝統的行事と村民との関係。④1949年頃の宗廟の数、宗廟と村民との関係。⑤宗族の共同土地の有無とその数。⑥ほかの村民の共有財産。⑦「橋会」・「路会」およびほかの民間団体の状況。

の成員が異なる村落に分布する場合に多くみられる。たとえば、雑姓村の腊園里と亭子下の徐姓村民は、同族村の坳子里・白竹沖の徐姓村民と同じ祖先の子孫であったため、正月と清明節に集まって祖先祭や墓参りなどをしていた。それに対して、村落内にいくつかの房が存在する規模の大きい同族村（石陂・上橋・源口）では、村民は房を単位として共同活動を行っていた。表4と表5が示しているように、石陂・上橋・源口では、祖先祭と「紅白喜事」はいずれも房を単位として行われており、村落レベルの共同活動はなかった。そして1947年前後には、石陂のある有力者の呼びかけのもとで、石陂・上橋・源口の陳氏宗族および周辺地域における陳氏宗族の共同祖先を祭る総宗廟が建てられたが、石陂・上橋・源口の陳氏宗族が集まってそこで祖先祭を行ったことは一回もなかったという。このような祖先祭が房ごとに行われることは調査村落に限らず、華北（山西省）でも同様にみられる（陳鳳，2007，pp. 87-91）。

もちろん、共同活動が村落レベルで行われる場合もあった。10戸から20戸頃の旺宜洲、豆沖、龍背といった同姓村がそれである。これらの同姓村は、内部には房があったものの、房の存在が顕著ではなかったこと、また村の周辺地域においては同じ宗族の成員が分布していなかった点が共通している。ただ厳密に言えば、こうした村落における共同活動は宗族の共同活動であり、宗族と村落との範囲が一致したことによって村落のレベルで表われたものにすぎない。

表4 調査村落における村民の共同活動（1940年代）－I¹⁶⁾

村名	類型・戸数	共同活動		
		正月	清明節	冬至
樟樹坪村	単姓・6	無	会食，祖先祭	会食，祖先祭
上橋	単姓・50	房内の会食・墓参り	無	無
石陂	単姓・50	房内の祖先祭	無	無
旺宜洲	単姓・24	祖先祭	祖先祭	豚肉の配分，祖先祭
源口	単姓・45	房内の祖先祭	無	無
竹下	多姓・12	無	無	無
豆沖	単姓・13－14	祖先祭	祖先祭	祖先祭
亜又坳	多姓・7	無	無	無
龍背	単姓・20－26	祖先祭，「灯籠」祭	無	無
水東	多姓・4	船神祭	墓参り	無
含鏡	単姓・15－16			
燕窩形	単姓・3			
相公廟	単姓・6			
練家	単姓・4	無	無	墓参り，会食

¹⁶⁾ 清明節と冬至の際に調査村落の村民は墓参りの習慣があるが、表3に示されている「墓参り」はただ村民が集まって墓参りを行ったことを意味し、村民が各自で行った墓参りは含まない。また、黄山山下と塘頭沖について「不明」と記したのは、現在、インタビューできる老人がいないからである。この点について表4・表5・表6も同様である。

村名	類型・戸数	共同活動		
		正月	清明節	冬至
艾家	単姓・6	無	墓参り	墓参り
腊園里	多姓・10	不明	祖先祭, 会食	祖先祭, 会食
坳子里	単姓・10			
亭子下	多姓・6			
白竹冲	単姓・2			
黄木山下	多姓・9	不明	不明	不明
塘頭冲	単姓・6	不明	不明	不明

(出所) インタビューより, 筆者作成.

表5 調査村落における村民の共同活動(1940年代) - II

村名	類型・戸数	共同活動		
		結婚式	葬式	男子の誕生
樟樹坪	単姓・6	会食	会食	無
上橋	単姓・50	房内の会食	房内の会食	無
石陂	単姓・50	房内の会食	房内の会食	男子が誕生した家は房レベルで各家に卵1個を配分する
旺宜洲	単姓・24	会食	会食	旧暦1月15日に男子が誕生した家は村民をご馳走する
源口	単姓・45	房内の会食	房内の会食	旧暦1月15日に男子が誕生した家は村民をご馳走する
竹下	多姓・12	会食	会食	男子が誕生した家はお正月に宗廟で祖先参り
豆冲	単姓・13 - 14	不明	不明	各家が順番に豚を飼い, 男子が誕生した場合は年末に豚を屠殺して豚肉を各家に配分する
亜又坳	多姓・7	無	無	無
龍背	単姓・20 - 26	会食	会食	祖先祭
水東	多姓・4	会食	会食	宗廟で豚を屠殺し, 豚肉を各家に配分する
含鏡	単姓・15 - 16			
燕窩形	単姓・3			
相公廟	単姓・6			
練家	単姓・4	会食	会食	祖先祭
艾家	単姓・6	会食	会食	無
腊園里	多姓・10	会食	会食	無
坳子里	単姓・10	会食	会食	無
亭子下	多姓・6	無	無	無
白竹冲	単姓・2	無	無	無
黄木山下	多姓・9	不明	不明	不明
塘頭冲	単姓・6	不明	不明	不明

2) 「換工」

祖先祭や「紅白喜事」のほか, 「換工」をはじめとする農業生産の互助活動も多く行われた。まず, 「換工」についてみよう。

「換工」とは, 調査村落において「交工」と呼ばれ, 農作業する際に行われる労働力や生産道具の交換活動をさす。1940年代の調査村落では, 耕牛が不足していたため, 労働力

の交換のほか、「以工代牛」（労働力と耕牛の交換）も多かった¹⁷⁾。「以工代牛」の場合には、耕牛を持たない者は他人の耕牛を半日ほど借用すると、耕牛の持ち主に一日分の労働力を提供しなければならなかった。

表6から明らかのように、「換工」の範囲は主に村落内部であったが、村落を越えた「換工」もあった。この場合の「換工」活動は特に宗族内部の成員間で多く行われていた。たとえば、水東・含鏡・燕窩形・相公廟の肖氏宗族、また腊園里・坳子里・亭子下・黄木山下・白竹沖の徐氏宗族の成員は、いずれも村落を越えて互いに「換工」を行っていた。また、異なる宗族間の「換工」もあった。樟樹坪と上橋、また練家と艾家との間の「換工」がそれである。前者の場合には、「換工」は主に婚姻関係で結び付いた樟樹坪の村民と上橋の村民との間に行われたのに対し、近隣の練家と艾家の村民は日常生活でお互いに手伝ったりする習慣があり、仲がよかったから「換工」を行ったという。ここで、農業生産の必要性だけでなく、農家がお互いに知り合いであるかどうか、あるいは仲が良いかどうかも「換工」を促す要素の1つであったといえよう。しかし、注意すべきは、「換工」は主に2~3戸の農家の間で行われており、族老や有力者主導の集団労働ではなかったことである。その意味では、「換工」は農業生産の必要性に応じて個々の農家が任意に行った互助活動であり、組織性を持つものではなかった。

表6 1940年代の調査村落における「換工」

村名	類型・戸数	「換工」の有無	「換工」の範囲
樟樹坪村	単姓・6	有	村内部、上橋村
上橋	単姓・50	有	村内部
石陂	単姓・50	有	村内部
旺宜洲	単姓・24	有	村内部
源口	単姓・45	有	村内部
竹下	多姓・12	有	村内部
豆沖	単姓・13 - 14	無	不明
歪又坳	多姓・7	無	不明
龍背	単姓・20 - 26	有	村内部
水東	多姓・4	有	村内部、近隣の肖氏宗族の村
含鏡	単姓・15 - 16		
燕窩形	単姓・3		
相公廟	単姓・6		
練家	単姓・4	有	村内部、艾家
艾家	単姓・6	有	村内部、練家

¹⁷⁾ 調査村落における耕牛の頭数と各階層の所有状況の詳細については明確ではない。しかしインタビュー対象者の多くが耕牛を持っていなかった。また土地改革の資料の中で耕牛の不足が問題として取り上げられていることから、解放前に耕牛が不足していたと推測できる。

村名	類型・戸数	「換工」の有無	「換工」の範囲
腊園里	多姓・10	有	村内部、近隣の徐氏宗族の村
坳子里	単姓・10		
亭子下	多姓・6		
白竹沖	単姓・2		
黄木山下	多姓・9	不明	不明
塘頭沖	単姓・6	不明	不明

(出所) インタビューより、筆者作成

3) 「看山」と水利の修築

1940年代の調査村落では、華北農村に多くみられる「看青」(作物の見張り)活動はなかったが、村民は共同で「看山」および水利の修築活動を行ったことがあった。「看山」とは文字の示す通り山を看視する意味だが、調査村落では、山に植えられた茶の木の実が盗まれるのを防ぐための看視活動をさす¹⁸⁾。

「看山」を行う主体は山の所有者たちであった。所有者たちが各自で行う場合もあったが、共同で人を雇って「看山」してもらった場合もあり、一様ではない。ただ、茶山(茶の木がある山)が宗族の共有財産であった場合には、宗族の成員が共同で「看山」を行うのが一般的であった。たとえば、1940年代にそれぞれ200畝から300畝ぐらい、100畝から200畝ぐらいの「公山」(共有財産としての山)を持つ龍背の張氏宗族と、水東・含鏡・燕窩形・相公廟に分布していた肖氏宗族は、各家が順番に「看山」を行っていた。しかし注意すべきは、この場合にしても、「公山」に対する「看山」活動と私有地に対する「看山」活動とが明確に分けられており、後者の場合には山の所有者は各自で「看山」を行っていたことである。

すなわち、「看山」は基本的には山の所有者が各自で行う活動であり、村落そのものとは関係はなかった。この点において水利の修築も同様である。山に囲まれて水資源が豊富な寧岡県においては、農作業をする際に山から水を引いて田に引き入れるだけで灌漑の問題を解決したが、毎年種を蒔く前に山から水を引く溝をさらって、流れをよくする必要があった。そのため、同じ溝から水を引く農家は毎年、清明節の頃に1~2日間をかけて共同で溝をさらったりしていた。本論文でいう水利の修築はこのような簡単な作業をさす。

インタビューによると、雑姓村か同姓村を問わず、また出身村落や土地所有数の違いを問わず、同じ溝から水を引く農家が一人の労働力を出して、水利の修築作業に参加していた。そして、田を多く持つことで同じ溝から水を多く引いた家が先頭に立ってほかの家を誘うのが一般的であった。

¹⁸⁾ 山が多い寧岡県では、農民の多くは水田だけでなく、山も所有していた。山の種類は茶の木がある山と茶の木がない山に大きくわけられ、前者は茶の実から食用油としての茶油を搾ることができるため、経済的価値があった。

4) 共有財産

共同活動が行われる物的基盤は共有財産である。本論文で扱われる共有財産とは、宗族共有の土地およびその土地から得られる収益、宗廟という共同施設、農民によって結成された団体が所有する土地（以下、「会田」）およびその土地から得られる収益をさす。ただ、各村落における「公山」の数が確認できなかったため、本論文では「公山」は扱わないことにする。また華北に多くみられる廟についても、以下の理由から、共有財産として扱わない。

すなわち、多くの村落に廟があった華北と異なり、華中地域に位置する江西省では、すべての村落に廟があったわけではなかった¹⁹⁾。1930年代末期に省内の6県214村を対象に実施した調査結果によると、総計175の廟のうち、115の廟が村落内にあり、残りの60の廟が村外部にあった（經濟部江西農村服務区管理处1940, p. 158）。この点では華北と明らかに異なる。

調査村落では、村廟は1つだけあった。現在の相公廟行政村が管轄している15の村落の、中心部に位置する「相公廟」がそれである。この廟の歴史について明確にはわからないが、肖氏宗族の老人によると、旧暦の1月1日と15日に行事が行われ、その費用は廟の近くにある相公廟・含鏡・燕窩形（肖姓村落）の村民3~4人が布施を請うことで集められたという。ただ、行事の参加者は肖氏宗族に限らず、龍市鎮周辺の村落からの村民も多かった²⁰⁾。この点からみて、廟は特定の村落または筆者が調査した21の村落の共有財産ではなかったことがいえる。

では、調査村落における共有財産についてみてみよう。まず、インタビューを通じて確認できるのは、同姓村は雑姓村より共有財産が多かったことである。表7が示しているように、宗廟を持つのは主に同姓村であり、宗廟をもつ雑姓村は1つもなかった。「公田」についても同様に、雑姓村の大半は「公田」がなかった。

共有財産の数の違いは、同姓村の間にもみられる。表6のように、宗廟が最も多かったのは、石陂・上橋・源口といった規模の大きい陳氏宗族の村落である。これらの陳氏宗族の村落と比べ、10戸から20戸程度の旺宜洲・豆沖・龍背には宗廟があったが、坳子里にはなかった。そして樟樹坪・腊園里・練家・坳子里・亭子下・黄木山下・白竹沖・塘頭沖といった10戸以下の同姓村においても宗廟はなかった。このことから、宗廟の数は宗族の

¹⁹⁾ 華北農村の村廟については、平野義太郎の研究のなかで多く論じられている。また石田浩は農村慣行調査報告を利用して、村落と廟との関係から解放前の華北農村の性格について検討した。平野義太郎（1943）と石田浩（1986）を参照。

²⁰⁾ 廟の存在は祭祀圏の視点から検討すべきだと思われるが、村落の老人はこの廟の存在をあまり意識しておらず、祭られる対象さえも知らなかったため、廟と祭祀との関係について詳細に検討することができなかった。

規模と関係していたことがわかる。しかし、宗族の規模だけでなく、経済力も宗廟の数と関係していた。坳子里の古老によれば、1940年代に腊園里・坳子里・亭子下・黄木山下・白竹沖の徐氏宗族の成員が宗廟を建てようとしたものの、相応の経費に足りなかったため、結果として建てなかったという。

表7 調査村落における村民の共同財産（1949年頃）²¹⁾

村名	類型・戸数	宗廟数	「公田」数
樟樹坪	単姓・6	無	1畝強
上橋	単姓・50	3個	30畝強
石陂	単姓・50	7個	30畝強
旺宜洲	単姓・24	1個	10 - 15畝
源口	単姓・45	2個	10畝強
竹下	多姓・12	無	無
豆沖	単姓・13 - 14	1	4畝ぐらい
歪叉坳	多姓・7	無	無
龍背	単姓・20 - 26	3個	2-3畝ぐらい
水東	多姓・4	1個、場所は燕窩形	不明
含鏡	単姓・15 - 16		
燕窩形	単姓・3		
相公廟	単姓・6		
練家	単姓・4	無	4畝ぐらい
艾家	単姓・6	無	4畝ぐらい
腊園里	多姓・10	無	3畝ぐらい
坳子里	単姓・10		
亭子下	多姓・6		
白竹沖	単姓・2		
黄木山下	多姓・9	不明	不明
塘頭沖	単姓・6	不明	不明

（出所）インタビューより、筆者作成。

そして「公田」については、同姓村のなかで、村落・宗族の「公田」と、村落・宗族内の房の「公田」という2つの種類があったが、この2つの種類の場合とも「公田」から得た収益は、主に祖先祭をはじめとする伝統的な行事の開催に使用されていた²²⁾。石陂を例にしてみよう。石陂では、房の「公田」があったが、村落の「公田」はなかった。老人陳QLによると、1940年代後半頃には二房の「公田」から毎年十数担の粿がとれ、その粿は主に「鬼節」（死者を祭る日、陰暦7月半ば頃）に行われる行事の費用と、元宵節（上元の夜、陰暦1月15日）の爆竹代として使用されていた。「公田」の管理については、毎年、「小房」

²¹⁾ 宗廟数と「公田」数は、ただ現在の村落の古老が記憶している1940年代末期のおおよそのものであり、精確なものではない。

²²⁾ 「紅白喜事」など特定の家に関わる活動が行われる場合には、その費用は「公田」からまかなわれるのではなく、主に「紅白喜事」を行う家が負担していた。

(房の分節)の各家から1人が代表として選ばれ、4つの「小房」から選ばれた代表4人はともに責任を負っていた。それに対して、村落の有力者である「二房」出身の陳ZHはほとんど関与しなかったという。

もちろん、「公田」の管理は有力者のコントロール下に置かれたこともある。たとえば、水東・含鏡・燕窩形・相公廟の肖氏宗族は龍市鎮龍市の肖氏宗族の分枝であり、彼らは自らの「公田」を持っていたにもかかわらず、「公田」からの収益を使用する際に龍市出身の肖WTの許可を得なければならなかった。1947年頃に、水東・含鏡・燕窩形・相公廟の肖姓村民は「公田」からとれた籾を使用してお正月に龍舞という行事を行おうとしたが、肖WTから強く反対された。それが元で、この4つの村落の肖姓村民は宗廟に集まって肖WTを殺そうと誓った。その詳細について明確ではないが、肖姓村民の認識では、「公田」は肖WTに所有されたものではなく、彼らがともに所有したものであることがここでもうかがえる。また、現在の村落の古老が全員「公田」を「公家的田」（「公家」の土地）と呼称していることも、「公田」は個々の家が共同で所有するものであることを示唆しているであろう。

つまり、「公田」に対する有力者のコントロールは、あくまでも「公田」の管理に対する影響力を持つことを意味し、「公田」に対する所有権を持つことを意味していない。そして「公田」の管理に対する有力者の影響力は、有力者自身の権威、有力者と村民との関係など様々な要素と関わっており、村民が必ずしもそれに服従したわけではなかった。

また、1940年代の調査村落では、結社が活発であり、政治団体や民間の娯楽団体が数多く存在した。こうした団体はすべてとはいえないが、その一部が共有財産を持っていた。たとえば、調査村落では、道路と橋の建設や修理を行うための「路会」と「橋会」があり、こうした「会」が結成される際に結成者から集められた資金、またはその資金で購入した土地は、「路会」と「橋会」の共有財産であった。さらに、娯楽活動を行うために集められた共有財産もあった。たとえば、竹下では、正月の際に「灯籠祭」（龍の形をした布または紙製の灯籠を捧で上にあげて踊りまわる集会）を行う習慣があり、それを行うため、村落の各家はお金を集めて2畝の土地を購入したことがある。しかし、以上のような活動を行うための共有財産は、ただ必要に応じて個々の家が集めたものにすぎなかった。

IV. 農村の共同性について

1940年代の調査村落における共同活動と共有財産から、少なくとも次の2点がいえよう。すなわち、①調査村落における共同活動はほとんど個々の家が共同で行うものであり、村落そのものと直接的な関係はなく、また村落を構成する個々の家の活動を統合するようなものではなかった、②調査村落における共有財産は個々の家を主体としており、村落または宗族内の特定の人物に所有されるものではなかった、ということである。ここで、個々

の家を「私」とみなせば、共同活動および共有財産で表される共同関係は、「私」と「私」との関係であり、「私」から離脱したものではなかったことが確認できる。その意味で、調査村落における共同関係は私的性格を持つものであったといえる。

ここでいう共同関係の私的性格は、決して個々の農家がばらばらな存在であったという意味ではない。第2節で検討してきたように、祖先祭や「紅白喜事」などは血縁の秩序に基づいた共同活動であり、とりわけ祖先祭が一族の成員としてのアイデンティティを強化する効果がある。また、「換工」・「看山」・水利の修繕といった農業生産の互助活動は、基本的には農家の私的利益に基づいたものであったとはいえ、農業生産条件や農家間の関係にも関わっていた。すなわち、個々の家の間には、血縁関係をはじめ、近隣関係、交友関係など様々なつながりがあったのである。

しかし、個々の家と共同活動との関わりをみると、祖先祭の開催や「公田」の運営・管理の面においては有力者の影響力があったものの、共同活動に参加した個々の家の間には身分上の支配関係はなかった。いいかえれば、同姓村であれ雑姓村であれ、個々の家を統轄し、またはその利益を代表するような公的人物または公的組織が欠如していた。その意味では、宗族であれ、村落であれ、分散的性格を持っていたといえる。

村落の分散的性格は、同族結合の弱さに起因したものではなく、内的には家族のあり方に規定されたものである。周知のように近世日本の農村社会において長子相続が一般的であったのに対して、中国の農村社会では、家産の均分相続という鉄則が成立していた。家産が均分される際に、長男や次男などを問わず、息子は親から平等に財産をもらう権利を有し、そして親の財産が一旦均分されると、息子の家が独立する単位となり、親は息子の活動を統括する権利を持たず、息子と息子との間にも互いに身分上の上下関係はない。このような家産の均分相続の上に土地の自由売買が加わり、村松裕次や梁漱溟がかつて指摘したように、家柄の連続や封建社会のような土地の壟断が困難となったのである（村松裕次、1975、p.150；梁漱溟、2000、p.53）。

旗田はかつて「村の土地、村の境界というものは、華北の村には元来存在しなかった」と指摘したが（旗田巍、1973、120）、調査村落も同様である。1940年代の調査村落では、房の「公田」、さらに房の範囲を超えた農民が任意に集めた「公田」など数多く存在していた。これらの「公田」はいずれも出資者に共有されるものであり、その範囲は「私」の範囲によって変化し、固定化された人物または境界をもつものではなかった。たとえば、雑姓村の腊園里・亭子下と同姓村の坳子里・白竹沖の徐氏村民が共同で購入した「公田」もあったが、坳子里の徐氏村民だけが共同で購入した「公田」もあった。前者は4つの村落の徐氏宗族成員の「公田」であったのに対して、後者はただ坳子里の徐氏宗族成員の「公田」だけであった。共有財産の集め方も簡単であり、ある活動を行う際に家を単位として資金を徴収するならば、その資金は出資者の共有財産となるのである。

同族村の人的結合の表われとしてよく論じられているのは、宗族内部の奨励金制度であ

ろう。1940年代の相公廟・含鏡・燕窩形の肖氏宗族，石陂・上橋村・源口の陳氏宗族は，中学校，高校または大学に入った者に対して，宗族の「公田」の収益から一部の奨学金を提供していた。しかし，このような奨励金制度が設けられたのは，ただ規模が大きく，また県政権レベルの指導職に就いた官僚がいた，陳氏宗族と肖氏宗族だけであった。そして陳氏宗族と肖氏宗族にしても，貧乏で子供が教育を受ける機会がなかった農家にとっては，奨励金は無縁なものであった。また調査村落では，村民が借金する際に，親戚に助けを求める場合が多かったものの，利息の多少は血縁とは関係はなかった²³⁾。このことも，同族村内部の相互扶助や互惠活動の限界性を示しているのである。

IV. おわりに

本論文は，調査村落における祖先祭・結婚式・葬式・伝統的な行事・農業生産の互助活動（「換工」・「看山」・水利の修築）など様々の共同活動，およびこうした共同活動が行われる物的基盤である共有財産について検討した。その結果，雑姓村より同族村の村民の共同活動が多く行われ，また共有財産も多かったものの，同族村であれ，雑姓村であれ，共同活動と共同財産の主体は個々の家であったことが明らかになった。すなわち，調査村落における共同関係は，家と家との間の私的関係にすぎなかったのである。

改めて指摘するまでもないが，村落の状況は地域によって異なっており，また調査村落だけでもそれぞれ個性があり，一様に論じることはできない。調査村落はただ華中地域に位置する無数の村落の中の一部にすぎない。山地が多く，平原地帯が限られているため，複数の小規模の村落が1つの地域に点在し，また同じ宗族の成員が異なる村落に散在していたことに調査村落の特徴があり，このような地理的環境に関して，祖先祭や「換工」といった共同活動は村落に限らず，村落間で行われることも多かった。しかし，本論文で指摘した共同関係の私的性格は家族のあり方に規定されるものであり，地理的環境によって規定されるものではなかった。むしろ，地理的要因によって，個々の家が村落を越えて共同活動を行ったことが顕著に表れたといったほうが妥当であろう。

調査村落の事例が示しているように，共同活動を行う主体が個々の家であり，村落そのものと関係はなかった。また，解放前の村落内部の人的結合が解放後の農業集団化の中で

²³⁾ 筆者は「利息の金額は血縁関係によって安くなることがあったのか」について村落古老に問いかけたところ，その大半は「なかった」か「実の兄弟の間でも仲がよければ，安くなることがあるが，仲が悪ければ安くなることはない。場合によって違う」と答えた。そして「利子がいらぬ場合があったのか」という問いに対して，村落古老たちは全員「なかった」か「きわめて少なかった」と答えた。この点においては，分家後の親子または兄弟の間でも普通に小作料がとられていた華北と全く同様である。華北については，中国農村慣行調査刊行会（1981），小口彦太（1980）を参照。

どこまで機能を発揮したのかについても、慎重に検討する必要がある。1940年代の調査村落では、「換工」をはじめとする農業生産の互助活動が多く行われたが、それはいずれも農業生産の必要性に応じて個々の農家が任意に行った一時的なものであり、個々の農家を組織して集団労働を行うような、解放後の農業集団化とは明らかに異なっていたからである。

本論文で指摘した農村の共同関係の私的性格からみて、解放後の農業集団化は、次の2点において解放前の農村の共同関係に関わっていたと考えられる。第1に、共同関係の本質が家と家との間の私的関係であったため、社会内部には上からの国家権力の浸透に対抗するような強固な力はなく、農業集団化運動が上から下へと推進されることが可能となった、という点である。第2に、農業集団化は農家間のつながりを利用して推進された可能性がある一方、個々の農家を組織して集団労働を行うのは必ずしも容易なものではなかった、という点である。この2点はあくまでも仮説であるが、解放後の農業集団化運動の基層レベルでの推進過程を実証的に解明していくことが、今後の課題である。

(てい こうらん・慶應義塾大学)

【参考文献】

〈日本語文献〉

足立啓二(1998),『専制国家史論』柏書房

天野元之助(1978),『中国農業経済論』龍溪書舎

—————(1979),『中国農業の地域的展開』龍溪書舎

石田浩(1984),「中国農村社会研究の再検討と分析視角」『関西大学経済論集』第5号

—————(1986),『中国農村社会経済構造の研究』晃洋書房

—————(1991),『中国農村の歴史と経済—農村変革の記録』関西大学出版部

今井清一(ほか)訳, G. W. スキナー著(1979),『中国農村の市場・社会構造』法律文化社

上田信(1986),「村に作用する磁力について(上)・(下) —浙江省鄞県勤勇村(鳳溪村)の履歴」『中国研究月報』第40巻第1号・第2号。

内山雅生(1984),「近代中国農村における『共同体』, その光と影」『金沢大学経済論集』第21巻

—————(1992),「華北農村社会研究」辛亥革命研究会編『中国近代史研究入門——現状と課題』汲古書院

—————(2003),『現代中国農村と『共同体』』お茶の水書房

奥村哲(2003),「民国期中国の農村社会の変容」『歴史学研究』第779巻

戒能通孝(1943),「支那土地法慣行序説—北支農村における土地所有権と其の具体的生活」『支那農村慣行調査報告書・第1輯』東亜研究所

川井悟(1989),「上海市金山県松隱郷浩光村の概況—自然集落の連続性」『経済学論集』(福山大学)第13巻

小口彦太(1980),『中国農村慣行調査』をとおしてみた華北農民の規範意識像』『比較法学』(早稲田大学比較法研究所)第14巻

小林弘二(1986),『旧中国農村再考』アジア経済研究所

笹川裕史・奥村哲(2007),『銃後の中国社会』岩波書店

- 佐々木衛 (1992), 『近代中国の社会と民衆文化—日中共同研究・華北農村社会調査資料集』東方書店
- 滋賀秀三 (1975), 『中国家族法の原理』創文社
- 清水盛光 (1944), 『支那社会の研究』岩波書店
- (1949), 『中国族産制度攷』岩波書店
- 孫江 (2007), 『近代中国の革命と秘密結社—中国革命の社会史的研究 (1895—1955)—』汲古書院
- 谷川道雄 (2001), 「中国社会の共同性について」『東洋史苑』第 58 卷
- 中国農村慣行調査刊行会 (1981), 『中国農村慣行調査 (第 1・2 卷)』岩波書店
- 陳鳳 (2007), 「伝統的社会集団と近代の村落行政：山西省の一村落を事例として」『現代中国研究』第 20 卷
- 仁井田陞 (1942), 『支那身分法史』東方文化学院
- (1962), 『中国法制史研究』東京大学出版会
- 二宮一郎 (1994), 「農業集団化と人的結合—上海市嘉定県馬陸郷吳家村の血縁關係を中心に」『中国研究月報』第 552 号
- 旗田巍 (1973), 『中国村落と共同体理論』岩波書店
- 平野義太郎 (1943), 「北支村落の基礎要素としての宗族及び村廟」『支那農村慣行調査報告書・第 1 輯』東亜研究所
- 深尾葉子 (2004), 「書評：内山雅生著『現代中国農村と「共同体」—転換期中国華北農村における社会構造と農民』」『社会経済史学』第 70 卷第 1 号
- 福武直 (1976.), 『福武直著作集第九卷・中国農村社会の構造』東京大学出版会
- 古島和雄 (1982), 『中国近代社会史研究』研文出版
- 三品英憲 (2003), 「近現代華北農村社会史研究についての覚書」『史潮』第 54 卷
- 溝口雄三 (1995), 『中国の公と私』研文出版
- 三谷孝 (1999), 『中国農村変革と家族・村落・国家—華北農村調査の記録』汲古書院
- 村松裕次 (1975), 『中国經濟の社会態制』東洋經濟新報社

〈中国語文献〉

- 『河橋郷(村)土改前各階層土地及生産資料占有統計表』(1951年) 井岡山市档案館
- 『會議記錄簿・虧欠賦谷卷』(1946年4月) 井岡山市档案館
- 黄宗智 (1986), 『華北的小農經濟与社会變遷』中華書局
- 井岡山革命根拠地党史資料徵集編研協作小組, 井岡山革命博物館編 (1987), 『井岡山革命根拠地(上)』中共党史資料出版社
- 經濟部江西農村服務区管理处編 (1940), 『江西農村社会調査』經濟部江西農村服務区管理处發行。
- 梁漱溟著, 池田篤紀・長谷部茂訳 (2000), 『郷村建設理論』農山漁村文化協會
- 寧岡県地方誌編纂委員会編 (1975), 『寧岡県誌』中共中央党校出版社
- 寧岡県地名辦公室編 (1987), 『江西省寧岡県地名誌』
- 『石破行政村土改試点工作總結』(1950年11月22日) 井岡山市档案館
- 余伯流, 夏道漢 (1987), 『井岡山革命根拠地研究』江西人民出版社
- 中共中央毛沢東選集出版委員会編 (1991), 『毛沢東選集・第一卷』人民出版社